

●書評

坂口ふみ著

『個』の誕生

キリスト教教理をつくった人びと』

A5判、七〇六十三頁、本体七二八二円

九六年二月、岩波書店



森本あんり

どうしてこんな地味な本が、わずか一年のうちに五刷も売れるのだろうか。出版界の商業主義化を嘆く声は多い。しかし、もしこのような本が作られ、それが多くの読者（謎のように）見出してゆくとすれば、諦めを口にするのはまだ早いかもしれない。

とても味わい深い本である。『個』の誕生』という題がつけられているが、そしてそれであてはずれにはならないのだが、読者の目前にくりひろげられる世界はもつと遙幽としている。これは「概念の小説」である。一つの問題を主人公と

した歴史小説である。そこには、時代や地理などの背景設定があり、起承転結の筋書きがあり、何よりも主人公たる概念の成長の過程がある。紀元前数世紀にさかのぼる父祖たちの系譜、直接の両親と生い立ち、怒濤の青年期に直面した試練と誘惑の数々、ようやく六世紀ごろに迎えた成人期、比較的安定した中世の壮年期、そして成人病を抱えて悩む近代の老年期、といった具合である。脇役もしっかりしており、それぞれの登場人物の内面的な動機づけもリアルに描写されている。

本書の大まかな主張を手早く把握したい人は、第四章の真ん中あたりから読み始めたらいいかもしれない。けれども、それは小説の結末を先に読んでしまうようなものである。あまり気の短い読み方はお勧めできない。長い時間をかけて本書が紡ぎ出す結論を、その糸紡ぎの過程からゆつくりと一緒に堪能してほしい。

ついでに言えば、おそらく古典的な小説の手法としては例外的で約束破り（この点で著者は現代風である）であろうが、本書の最初と最後には、ひとりの友の生と死を「合わせ鏡」のように用いながら、著者自身の姿が書き込まれている。もの書きは誰でもこのような心象風景に内からの促しを感じつつ「書く」という行為に至るのだが、ふつうその部分は人目に触れることがない。それが明かされていることも、本書の魅力の一つであろう。だが、まさかその十数頁のために七千円を払う人は多くあるまい。本書の真価は、やはりその間に挟まれた二百数十頁の厚みに見出されるべきである。

では、この小説を織りなす本来の主人公とは誰か。それは、神学校にでも行かない限りまずお目にかかることのない、

「ヒュボスタシス・ベルソナ」という名の控え目な概念である。この概念は、遠くはバルメニデス、プラトン、アリストテレスという錚々たる存在論と形而上学の系譜をもち、ヒュボスタシスとベルソナという、元来まったく別の家系に属する両親から生まれた、当時の哲学の間尺にあわない奇妙な合成概念である。著者によれば、キリスト教の全歴史は、この合成によって生じたポリフォニックな幅と自由さと豊かさの上にはじめて展開し得たものである。その生い立ちと成長の過程はけっして平坦でも平和でもなかった。ヒュボスタシスには「スプスタンチア」という名のラテン系の妹、ベルソナには「プロソポン」というギリシヤ系の兄があり、さらに両者には「ウシア」や「ビュシス」という共通の友人がある。本書はこれら諸概念の錯綜する接近離反と重なり合いをていねいに論じ分けている。一族はアンチオキア家とアレクサンドリヤ家との歴史的な対立抗争に巻き込まれ、そこへさらに大祖父のプロチヌスや分身の術を使う忍者まがいのレオンチウスなどといった人物が登場して彩りを添えることになる。

キリスト教の根本教理は三位一体論とキリスト論にあるが、これらはともに、バルメニデス以来の冷徹な矛盾律同一律からすれば、論理的な背理である。どうして一が三であり三が一であり得るのか。二が一であり一が二であり得るのか。二世紀から六世紀までの間、キリスト教はこの問いに答えようとして、ニカイアとカルケドンという二つの大きな公会議を生み出し、その後と間に多くの魅力ある個性的な神学者を生み出した。ヒュボスタシス・ベルソナ論は、その多くの人々の努力と苦心の結実である。本書はこの概念が生み出されて完成に至るまで人間理性の激しいぶつかりあいと混乱、そしてその中からぼろりとこぼれ出た正統教理の球の行方を叙述する、まるでフットボール観戦記のような熱気をおびた概念史である。

けれども、本書の目指すところは、教理発展の歴史の叙述ではない。著者はそれを通して、「本質」や「普遍」に解消されることのない「個」の存在と尊厳が思想的に確立されていった過程を跡づけようとする。ふつう「個」の概念のめざめは、近代西欧の出来事であると思わ

れている。しかし著者によれば、「純粋な個としての個、かけがえない、一回限りの個の尊厳」(二七頁)は、古代末期のこのヒュボスタシス・ベルソナ論とともに生まれた思想なのである。それ以前の常識では、プラトンは言うに及ばずアリストテレスでも、ものうちでほんとうに重要なのは「個」のうちに具現化されている「普遍」であり「本性」であり「本質」である。ソクラテスという人間のうちで重要なのは、たまたま彼において現象しているところの普遍的な「人間」でありその本質たる「理性」なのであって、クサンチッペを恐れる生身の個有個としてのソクラテスその人ではない。ヒュボスタシス・ベルソナ論は、その視線の方向を転換させ、愛の対象としての単独者、とりわけ神の救済愛の対象としての単独者をこそ主題とするキリスト教思想の中核をかたちづくった概念である。このようにして定位された「個」は、中世には普遍性要求の強いアリストテレス哲学と創造神信仰に枠づけられていたため、閉鎖性や孤立性を免れていたが、近代になってそれらの枠づけが見失われると、はじめから内蔵されていた鋭利な

切断力が作用して、それまでの生命的な「個」の人格はデカルト的・カント的な「意識」や「思惟」へと還元されてしまふ。近代の「個」は関係性を失い、とらえようのない宇宙の虚空にはっきりと浮かぶ孤立した存在となつてしまった(著者は、ヘーゲルの普遍的理性的存在論に対してキリスト教の真髄を「個別性の蹟き」に見た単独者キルケゴールをどのようには評価するであろうか)。ヒュボスタシス・ベルソナ論は、一方では「流動する存在の流れのうちのいつときの留まり」として、宇宙的な因果連関の存在論から個を語り、他方では「舞台と劇のうちの一役割」として、社会の中での有機的な関係論から個を語る。それは、常に他者や世界と関係をもちつつもなお個としての固有性をもつ、力動的で生命的な個なのである。

さてしかし、もしここで終わっていたなら、本書は単に体制や制度をこきおろして枠に囚われない生命の躍動を謳歌する、ありふれた脱構築の一例にすぎなかったことであろう。そうではない。著者には、精神とその受肉、思想とその表現、原理とその世界化、理念とその具現化、

靈感とその制度化、に対する両義性の貴重な感覚がある。思想を扱う学問でしばしば聞かれるのは、精神はよかつたがそれが制度化し固定化したために墮落した、という評論家的な解釈である。著者は、「理性の硬化、概括化、カテゴリー化」といった哀しみを知りつつも、なおそのような受肉化の必要性と意義を評価するといふ、きわめてキリスト教的な現実力学の認識をもっている。そこに、評者は本書の最大の徳を見る。

他に、東方の「人間神化」思想と西方の「現状救済」思想にあらわれた「敬虔の型」の違い(七四頁)、制度や組織を忌避した東方がかえって国家権力との癒着をひき起こすという皮肉(一〇五頁)、俗人貴族ベラキウスのギリシヤ的なエリート徳に対する予定論者アウグスチヌスの苛烈な平等主義(一四五頁)、キリスト単性論とイスラムとの相似性(二〇七頁)など、個別的に興味深い論述が随所に見いだされる。なかでも、現代日本の知性がなしくずしの欧米化を進めてきた結果がこんにちの皮相な「魂のない文明」である、という指摘(三三三、三〇一頁など)は鋭い。

著者は、長年ドイツに在住し、ミュンヘンで学位を取得後、東北大学で教えた。寡作な学者であるが、その理由は本書にもほの見えている。著者は、一九七四年になされたある講演(なしいはその記録)において、本書で追求すべき主題の基本構想をすでに得てしまったのではないか(四四、二七五頁)。とすると、その後二〇年が本書の執筆に費やされたことになる。やや年代の古い文献による立論も、時流にとらわれない研究態度を示唆している信頼感を与える。ハルナック、ロース、リーツマンなど、神学校以来久しくご無沙汰していたドイツの古い教義史家の名前を見るのは、なつかしい家に帰つたような思いである。昨今は学者の業績を論文や著書の「数」で量ろうとする傾向にあるが、本書を一頁ごとにゆつくりと繙いた後では、多作はむしろ恥であると思われてくる。耐用年数の短い手軽な啓蒙書を乱発するばかりでは、良心的な学術出版はいよいよ育たない。生涯に一冊、このような手応えのある著作を生み出すことこそ、社会に対する学問の貢献である。